

Whitman が Emerson から得た思想

谷 口 敏 郎

ま え が き

Whitman の “Leaves of Grass” 初版 (1855) は、長い序文と12の無題の詩を彼自身植字印刷して発行したものであり、又それが内容の為に Whittier のような当時高名の大衆詩人によって忽ち炉に投げ込まれ、社会一般から非難されたにも拘わらず、当時 New England の精神運動の指導者であった Emerson からどんなに歓迎され賛辞を受けたかは有名なことである。Emerson は献本を読むと早速未知の Whitman に手紙を書いて前途を祝福した。この手紙の一節 “I greet you at the beginning of a great career, R. W. Emerson” を “Leaves of Grass” の第2版(1856)の裏表紙に金文字で、しかも Emerson に諒解を求めずに印刷して物議をかましたことも、詩人一生の黒星として語り草となっている。

なぜ Emerson がこれほど Whitman の出現を歓迎したかは、彼の待望していた新時代の詩人の素質をそっくりそのまま Whitman に発見したからであることは言うまでもないが、自己の思想を巧みに調節して詩句に表現してくれた Whitman に対して “I rubbed my eyes a little, to see if this sunbeam were no illusion” とまで云って手ばなしで悦んだ Emerson に、思想の上で Whitman はどのように応じていたのであろうか。

Whitman の思想は南北戦争を経て若干変遷する。例えば霊肉平等観は初版後14年に書かれた “Passage to India” では霊の方が主体性をもつ表

現になっている。Emerson の影響は Whitman が詩人としてまだ瀕踏していた初期版に濃厚に現われている。したがってここでは初期版について考察したい。

1. Emerson と Lowell

Whitman が New Orleans から New York に帰って The Brooklyn Freeman 紙の Editor となり、同紙を1849年9月に辞して後6年間は、父の大工仕事の不器用な助手として、傍ら読書に過したのであるが、この期間はおそらく新時代の詩人として初舞台をふむための準備をしつつ詩を書き溜めていたのであろう。弁当箱と共に聖書や Shakespeare や Emerson の作品や Ossian の翻訳が包まれていたと云われているが、“Leaves of Grass” 初版の年は Emerson 52才、Whitman は36才であり、前者は既に1836年に“Nature”を發表し、翌年には Harvard で Phi Beta Kappa Society に招かれて後世に残る名講演“The American Scholar”を行っている。“Nature”の發表は、“Leaves”に遡ること19年である。この間 Whitman が、Transcendentalists の主導者となって名を駆けていた Emerson の作品を無視したとは考えられない。一般に Emerson は1836年から1860年に渡って最上の論説を書いたと云われているが、前2者の次に“Divinity School Address”(1838)、“Essays,” 1st series (1841)、及び“Essays,” 2nd series (1844)、“Representative Men”(1850)、“English Traits”(1856)と続いている。即ち Whitman は尠くとも初版出版までに“Representative Men”までは見ているものと考えられる。彼が Emerson を読んだかどうかについては、1860年に“Leaves”第3版出版に関して Boston を訪れた時、Trawbridge に初版出版の前年に Emerson を読んだと告白している事実がある。しかし前年にだけ読んだとはどうしても考えられない。

Harvard 大学は既に1805年に Calvinism から Unitarianism に移って

おり、Whitman の20才台には2つの型の知識人を社会に送り出していたように思われる。即ち Whitman と同一生涯の期間をもった James Russel Lowell に象徴されるような古い型のもと、Emerson 的傾向をもった新しい型の人々の2つである。Harvard の教授作家として盛んに詩を書いた H. W. Longfellow や産褥熱の大家 O. W. Holmes は J. R. Lowell と共に自らを Brahmin と称した誇り高い知識人であるが、彼らの頭脳からは欧州留学から得た欧州的因襲は生涯ぬけず、その思想は保守的であり、生活は上品であり、創作には遅ましい想像力が欠け、本能や直観から書かれたものはたわ言にしか写らなかつた。古い時代の栄光を背負ったこの人々はそれを正しいと信じていたのである。

いつの時代にも新旧の争いはつきものであるが、当時の状況も而りて、Emerson は Russel よりも16才年長であつたに拘わらず新時代の到来を自覚して、いち早く New England に精神運動を起したのであるが、1836年に“Transcendental Club”の前身“Aesthetic Club”に出席した仲間10数名の中で Frederick H. Hedge や James Freeman Clarke や Theodre Parker はいづれも Emerson と共に Harvard の神学校出身者である。George Libley や Orestes A. Brownson, Margaret Fuller, W. H. Channing, J. S. Dwight, Elizabeth Peabody などは、Emerson を中心に Transcendentalism の発展や“Brook-Farm”の創設に寄与した人々であるが、いづれも Emerson を理解した新しい時代の人々であつた。後に Emerson の説に全く生涯を捧げた Henry David Thoreauこそ全く Harvard の異端者といつてもよいほどの新しい行き方をした人と云い得る。

Whitman は青年時代を殆んど New York 市に journalist として過しているが、毎度英小説家 Dickens の小説到着を待ちこがれていた彼が、Boston の思想の2つの流れに無関心であり得たわけではない。スイスと独乙で教育を受け、合衆国に来て Harvard で地質学や生物学を講じていた

Jean Louis Rodolphe Aggasiz の講義に出席したり、天文学に関する文献まで手許に置いた知識欲の旺盛であった Whitman が、Boston から遠くない Concord でどう云うことが行われていたかに無智であったとは思われない。

このような新旧の物の考え方の差は、後になるが Emerson が書いた Thoreau の思出の文と、Russel が Thoreau について書いたものを比較してみてもよく判ることである。前者は1863年の夏 The Atlantic Monthly に公表され、後者は1865年に、Thoreau の死後に書かれたものであるが Russel はこの文で、Thoreau と共に Emerson 一派の自然愛好者を皮肉り、けなしている。そして “It is very shallow view that affirms trees and rocks to be healthy . . .” と云い、自然崇拜者は皆 sentimentalists であり shallow であると繰り返し述べている。Thoreau も Poe も Russel の理解できない文人であり、本能とか直観とかは凡そ信頼できない野蛮なものであった。

Whitman は20才を過ぎた頃から社会改革運動に興味を示し、New Orleans まで遙々弟 Jeff を連れて The Crescent 紙に就職したのも、その見かけの怠慢性と進歩性の故に The Daily Brooklyn Eagle 紙の editor の職を誠首されたからであった。このように進歩的傾向をもった Whitman が早くから Emerson を読まなかったと云う証拠はない。

2. Transcendentalism

Emerson は Unitarian 派の牧師の息子に生れ、1821年に Harvard を卒業し、1829年には Boston の教会に努め、聖餐式の意義について苦悩の末に辞職したことは周知のことである。New England の Unitarianism は正統カルビン神学の根本的な教義三位一体を否定することから出発しているが、神の恩寵と、神の選民の思想は捨てられ、死によるキリストの贖いも排せられた。従って調停者キリストは神性をもつ必要がなくなり、神

の坐から単なる人間としての宗教的天才の坐に転落した。彼らはただ the one God だけを認めればよかったのであるが、この立場は 1835 年に Nathaniel Frothingham によって確立されたと云ってよい。Harvard で Unitarian 神学を学んだ Emerson が正餐式を続けている Boston の教会で悩んだのは当然であろう。William Ellery Channing, the elder のような Unitarian の過激思想家は 1819 年に “Discourse at the Ordinations of Jared Sparks” を発表して、宗教の精神性、生活の純潔、思想の独立と改革の継続を主張しているが、彼のキリスト教の形態についての強力な立論は “Evidence of Revealed Religion” (1821) に見られる。この頃の New England の Unitarianism については、後 Octavius Brooks Frothingham が “Boston Unitarianism, 1820—1850” に述べているが、とに角当時には The Universalists や Broad Churches の活動も見られ始めて、父なる神の観念は排せられて、むしろキリストの兄弟性が強調されつつあった。

Emerson は宗教思想の過渡期に巻き込まれながら、つとに 1821 年に書いた懸賞論文 “The Present State of Ethical Philosophy” の中で主張した道徳的規準としての直観に思いを凝らしていた。そして紀元 3 世紀の Neo-Platonism の創始者 Plotinus の神秘思想に強力な影響をうけたのである。彼は Plato よりも Plotinus から reality に接近するための手段として直観の価値を教えられ、神秘経験の直接知覚、The Great Soul への人間の旅の原理、孤独な冥想の神秘的効果、實在の不滅などを教えられた。神秘主義とは己れより高いもの—最高は God であるが—との identification の自覚を原理としているが、illumination の世界を体験したに相違ない Emerson は、後、彼の “Over-Soul” 論や “The Conduct of Life” に Plotinus の影響を現わしている。更に Jacob Boehme や Swedenborg の神秘思想に学んで、純粹の宗教体験を尊ぶようになった。

Emerson の “Nature” や “Divinity School Address” の中にはこの直

観思想と観念論が見られるが、観念論は Kant からの影響である。1781 年に出版された Kant の純粋理性批判は、精神と物質の両方の存在を仮定し、同時に両者の存在条件として The Reason により分類された a priori 的概念を仮定することにより知識の最後の本源に到達しようと試みたものであるが、この直観思想は彼の弟子 Frederick Jacobi によって更に進められ、直観とは、God と感知され得る世界の存在の最大の証拠であるとまで云われるようになった。この直観思想は直接独乙語から得られたものではなく Coleridge やフランス哲学者 Cousin を通して New England にもたらされたものである。Harvard の教授作家と異って起絶主義者たちの多くは Emerson を含めて独乙語を楽に読めないで1829年にアメリカで再版された Coleridge の “Aids to Reflection” に頼ったと云われている。このことは又独乙の純粋観念哲学よりも Coleridge の哲学の方がより具体的であったためであるが、更に見逃せないのは Caryle や Wordsworth がもたらした影響である。前者は初期に Kant 哲学に学んでいるが、彼の “Sartor Resartus” は親友 Emerson によってアメリカに導入された。ちなみに Whitman の “Leaves” の初版を Caryle に送ったのも Emerson である。1840年の “The Dial” 誌¹10号に発表された “Thoughts of Modern Literature” と、1843年4月号の “Europe and European Books” は Emerson が Wordsworth の思想を凝縮した “Intimations of Immortality” の影響を受けて書いたものである。Reason よりも Faith を重んじる Wordsworth の教義に学ぶ所が多かったように思われる。

更に Emerson は40才台になってから、自己の直観や観念論思想に共鳴する理由で印度哲学に学んだ。紀元前2000年に遡るバラモンの聖典 The Vedas を通じて Brahma の思想を知り、The Bhagavad-Gita⁴ や The Vishnu Purnā⁵ を通じて、自分が既に1841年に発表した “The Over-Soul” の思想に如何に印度思想が酷似しているかを発見して、いよいよ Over-Soul の信念を固めたことと思われる。彼の印度哲学の知識は、1845年42才

の時に英国の John Chapman に依頼して、The Bhagavad-Gita の翻訳を入手した頃からであるが、更に The Upanishads⁶ を知って印度宗教哲学上の Brhama が彼の云う Over-Soul と同一であることを知ったことであろう。バラモンの Brahma とヒンズーの Atman は同じものであり、多少ニュアンスの差があっても、それは梵天であり、宇宙我であり、大我であり個人の人間の self の本源であり、self は冥想と直観によってこの大我に合一できると云う印度哲学は全く Plotinus の神秘思想と規を一にしている。

基督教に若い頃から訓練を受け、独乙観念論哲学に培かれ、Plotinus の神秘思想に学び、大我思想を発展させ、更に印度哲学に支援された Emerson が、Whitman を発見した時は、既述のように52才となっていたが、彼の Transcendentalism は彼が印度思想に触れる以前に既にその形態を明瞭にしていたのである。彼ら一派の人々は、人間の soul は神秘性のものであり、凡ての人間の中で同一であるとの信念から出発し、われわれ人間の本能と願望は同一であり、自己の内部にあらゆる Knowledge の手段をそなえていると考えた。

自然はわれわれの五官に投影された神の巨大な影であり、その法則はわれわれの思想の法則と完全な類似性を持ち、物質的要素は道徳的要素と密接な類似点があり、神は Over-Soul となり、各人の Soul は直観によってそれと意志を通わすことができる。人間はこの Over-Soul の権化であるゆえに、神の属性の凡てを所有していることになり、神の一部こそ自分であると意識することが Transcendentalism である。

Quakers は“inner light”を尊重するが、人間は神の一部であるという Emerson の考え方は、Deism や Unitarianism の遠い神よりも自己が神の一部であると自覚する点で Quakerism に近い。Whitman は神を“elder brother”と親し気と呼んでいるが、彼も幼時から Quakerism のうちに養われたので、Emerson の考え方を容易に受け入れることができ

たと思われる。彼は回想録に書いている通り、少年の頃、父と共に当時尊敬されていた Quaker の師 Elias Hicks の説教をよく聞きに行ったものである。

このような “Nature” や “The American Scholar” や “Divinity School Address,” 更に Essays 集に述べられた Emerson の Transcendentalism は Transcendental mind をもった Whitman に、むしろ Thoreau よりも容易に理解吸収されたものと思われる。そして特に新詩人待望論である Emerson の1841年の “The Poet”こそ特に Whitman を刺激したに相違ない。

3. “The Poet”

Whitman の散文が晦渋である程度に Emerson の散文は論理的にパラグラフの構成が不完全であり整然と系統的に書かれていないことは誰も認めるところである。彼の思想は論理的に追求が不可能で、Whitman の詩句と同様に sentence から与えられる思想を、後にモンタージュしなければならない。Whitman の友人 John Burroughs が Whitman の伝記の中で、彼の思想も「あまり真に眼を接近させないで、後でモンタージュすると意味が判ってくる」と述べているように、Emerson の散文も読者泣かせである。行文の中で sparks のように味のある意味深いものが発見される点では両者は甚だ似ている。こう云う Emerson の論述の仕方が Whitman に影響したかどうかは判らないが、両者とも気質が romantic であり、神秘家であることにおいては変りはない。

William James が “The Varieties of Religious Expenierce” (1902) の中で述べているように気質が Romantic である人に神秘的宗教体験を持つた人が多い、J. J. Rousseau しかり、Whitman の伝記を書いたカナダの医師 Buck も、William Blake も Emerson も Whitman も同一気質の人々であり、同様な体験をもっている。夕食の時、部室の中に立ち

のぼるもやの中に大天使の「喰いすぎるなよ」と云う声を聞いた Swedenborg. こそ彼らの代表者であろう。彼はその後日毎に大天使と交際し天界のキリストの動静を手にとるように知ったことが彼の “The Essence of Christianity” のなかに書かれている。

一体こう云う精神タイプを持った人は他人の暗示にかかり易く、又多数の聴衆を相手にして語られる言葉がことごとく自己一人に向けられたものと感じて、深くその影響を受け易い。ゆらい mystic と称せられる人は、自分のつくり上げた世界に他の世界をことごとくとり入れて同化し合一することに満足するものである。そして多少の異和感にかかわらずあまり矛盾を感じないものである。いわゆる教祖的人物なのである。その信念は絶大であり従って同一タイプの人間に深い魅力を与えるものである。興味ある事実は Whitman の詩集を読んで、多数の人に語りかけられた詩人の詩句を自己のみに向けられたものと思ひ込んで、彼の云う “robust woman” とは自己一人と思ひ込み、Whitman に結婚を申し込んだ Gilchrist 夫人の行動である。彼女は Blake 伝を書いていた Gilchrist 夫人であったが、夫の死後、3児を連れてはるばる英国からアメリカに來たが、この夢のような詩句を通した切なる恋愛も Whitman の辞退にあつて実を結ばなかつた。

神秘家 Emerson の新しく求めていた新しい型の詩人待望の言葉を神秘家 Whitman はおそらくそのまま自己一人に向けられたものと思ひ込んだにちがいないと思われる。

Emerson が “The Poet” の中で主張した新時代の詩人の要素は sentence を通じて次のように解せられる。

「然し世界の最高詩人は、あらゆる感覚的な事実の二重の意味、いや四重の、百倍の、いや更に多くの意味を探ることを決してやめない」、「あらゆるこの時の流れと、その生物が流れ出る泉こそ本質的に理想的であり美しいものである。そして詩人即ち the man of beauty の本性と職能をわ

われわれに考えさせる」,「詩人は同時代の人々の中で真理と彼の芸術により孤立するが、その追求のうちにその真理と芸術がおそかれ早かれ凡ての人人を魅きつけるであろうと云う慰めをもつものだ」,「詩は時間が存在する以前にすべて書かれたものだ。そして空気が音楽となっている領域にはいりこめる位にわれわれがなった時はいつでも、われわれはこれらの原始の囁りをきき、書き下ろそうとするが、時々言葉や詩句を失い、われわれ自身のもので置き換え、詩を書き損じる」,「思想と形態は時間の秩序において同じだが、発生の順序では思想が形態にさき立つ。詩人は新しい思想をもち、表明すべき全く新しい経験をもつ、彼はそれが自分にどうであったかを告げるであろう。そして凡ての人人は彼の幸運の中で、それだけ一そう豊かになる。各時代の経験は新しい告白を必要とし、世間は常にその詩人を待望しているように見えるからだ」,「物事はシンボルとして用いられることを許す。何故なら自然はシンボルであるからだ—全体でも各部分でも」,「賢明な Spenser が教えるように、霊は肉体をつくる」と云って彼は Spenser の次の詩を引用している。

“So every spirit, as it is more pure,
And hath in it the more of heavenly light,
So it the fairer body doth procure
To habit in, and it more fairly dight,
With cheerful grace and amiable sight,
For, of the soul, the body form doth take,
For soul is form, and doth the body make.

Spenser は人も知るエリザベス朝の有名な詩人であるが、この詩が“The Poet”中のただ一つの原文引用であるところから見れば、霊肉の關係を歌ったこの詩はよほど Emerson の気に入ったものであろう。「われわれは世界の秘密の前にいる。そこでは実在が現象となり、統一が多様性に移り変るところだ」,「わいせつな人にとって卑しいもの、又わいせつな

ものも新しい思想関係において語られると輝かしいものとなる」、「単なる語の羅列も想像力ある興奮した心には暗示的なものとなる」、「最も貧弱な経験も、思想表現の凡ての目的に対して十分に豊かなものだ」、「またわれわれは欠点や醜悪なものを聖なる目的に用いる。かくして、世界の悪は悪なる眼にのみ悪であるとのわれわれの意識を表現する」、「詩の読者は工場や鉄道を見て、風景詩がこれらによって破壊されていると思う、しかし詩人はそれらが凡て蜂や蜘蛛の幾何学的な巣にまさるとも劣らず偉大な秩序にはいることを見る」、「詩人は、奥底の知的知覚により事物に力を与える。その力はそれらのもの用途を忘れさせ、あらゆる物云わぬ無生物に眼と舌を与える」、「詩人の魂が成熟した思想にたどりついた時、魂はその詩歌を自分から引き離すものだ…」と云い、それをけなすもの言葉は翼をもたぬ故にやがて地に落ちるが、詩人のメロディは「上昇し跳躍し無限の時間の深みにつらぬき入るものだ」と云う。更に、「崇高な vision は清潔にして純潔なる肉体に存在する純真単純な魂に来るものだ」、「かくして詩人の生活習慣は平凡な影響が彼を悦ばすほどの低い調子におかれるべきである」、「彼の快活さは日光の賜でなければならぬし、彼の吸気のためには空気だけで充分、水で酔うべきだ」、「詩人は色彩や形態に停止しなかった、だがそれらの意義を読んだ。又彼はこの意義に休んじてはいけぬ。彼は同じ対象を彼の新しい思想の解説者につくりあげるものだ」、「圧制的な心眼をもった天才はまだアメリカにいない。彼なればわれわれの比類なき物質の中に、又時代の野蛮と物質主義の中に、彼がホーマーや中世やカルビン主義の中に描かれているのを見て称賛すると同一の神々の謝肉祭を見るはずだ」、「われわれの軍隊の太鼓のとどろき、政見演説とその政策、われわれの漁業、黒人やインディアン、われわれのボートやわれわれの拒否、無頼漢の激怒や正直者の無気力や北部の生業、南部の植民、西部の開拓、オレゴン、テキサスはまだ歌われていない。それでもアメリカはわれわれの眼には1つの詩である。その豊かな地理は想像力を幻惑する。そし

て長く韻律を待たぬであろう」と具体的に新詩人の仕事を明瞭に述べている。最後近く、「汝はただ汝自身を知る人に知られん、彼らは、いとも優しき愛もて汝を慰めん」とわざと古文調で予言的口調で述べている。

これらの文は、Whitman が具体的に詩に書いている内容から考えて、彼が影響をうけたと思われるものをひろったものであるが、これらの文から引き出される結論は、「新時代の詩人たるべき人は、身心を純潔にして vision を招来し、事物の本源を悟り、詩人の魂の翼にのせて時代の告白を永遠に飛翔させるべきで、アメリカの物質文明の中に、その平凡卑近な題材を求むべきである。批評家は問題でない、知る人ぞ知る」と云うことであろう。

4. 卑近なもの

Whitman が特に自己の血液の純潔を尊んでいたことは、若い頃の“Sun-down Papers” や南北戦争勃発を聞いて早速下宿で認めた決意書など見れば明瞭であるが、案外素直に師ときめた Emerson の教えに従っていたのかも知れない。彼は飲食に血を濁すと思われるものは一切用いなかった。そして Emerson のこれらの言葉を神秘家らしく天来の啓示のように受け容れたものと考えられる。更に“Nature” や“The American Scholar” や“Self-Reliance” から学んだと思われるものが“Leaves”の初版の序文や初期の詩の中に現われている。

“The American Scholar”の中で、Emerson は「他国の学問への依存と、われわれの長い奉公は終りに近づいている。われわれの周囲で生活に殺到している巨万の人々は外国の収穫物の残滓で養われ得ない。琴座の星のように詩が甦って新時代を導き入れることを誰が疑い得ようか。その星は今天頂で輝いているが、いつかは千年にわたって北極星となると天文学者は云っている」と述べているが、これは“The Poet”への予備的発言である。そして Book-Worm の代りに Man-Thinking は書物か

らインスピレーションを得るべきであることを云い、「この世界は— The soul 即ち The other me の影であるが一まわりに広く存在する。その魅力はわれわれの思想を開き、自己を自分自身に熟知させる鍵である」とも述べ「自己の心の秘密に降りるとき、彼は凡ての心の秘密に降下したことになる」と述べて後の“The Over-Soul”を予告している。万人は皆同一の心を持ち、自己の最も深い所に存在するものを表明する時にこそ、万人は感動するという考え方は、更に彼が「彼（雄弁家）が彼の最も private な秘奥の予感に潜入することが深いほど、これこそ最も受け入れられる最も公けの普遍的な真なるものであることを見て驚く」と云ったり、“Self-Reliance”の中で、「君自身の思想を信じ、君の秘めた心の中で君に真なるものは万人にも真である—それが天才」だと言う時、発言者が誰であろうと、その語る所は万人の共感を得てその心を打つと云うことは云い得て妙である。そして続いて次のように警告する、「偉大なる芸術作品はわれわれの自然発露の印象を、四面楚歌の中においても上気嫌な不屈性をもって固守すべきである。さもないと明日ともなれば他人が正確に自分の考えたことを立派に云うことになり、自分は他人におくれをとることになるう」と。

19世紀初頭のアメリカでは文学の realism は胎動中であり、Whitman を頂上とするアメリカ romanticism の影にかくれ、漸く生声をあげたのは Mark Twain の活躍するようになった南北戦争後のことであるが、Emerson は“The American Scholar”の終り近くで realism 文学とは云わないが、未来の文学の主題は邦辺にあるかを予言している。この文の中で、新旧の時代が並び立ち、比較されることを許す革命時代を歓迎した後、後は次のように云っている。「社会において最も低い階級と称せられたものの地位向上に影響したと同じ運動が文学において非常に著しい均しく好意ある様相をとったことが、来るべき時代の徴候の一つである。崇高にして美わしきものの代りに、卑近なもの、低いもの、平凡なものが探ら

れ詩化された」と文学の流れに注目し、「貧民の文学、児童の感情、巷の哲学、家庭生活の意味が時代の問題だ」と述べて、時代の人が漠然と感じているものを明確に言葉とて表明している。これらの言葉は南北戦争の26年前に発せられたものであり、これらの言葉を実行に移した Whitman は発想において romanticist ではあったけれど、その題材においては realism や後の naturalism のそれにも匹敵するものがある。両者ともいわゆる realist の文人と異なる点は、低く平凡で卑しい題材の下に流れるそれらを統一して支配する靈性を主眼にしているのであって、Whitman が reality と soul のかけ橋の詩人であると云われる理由もここにある。このことは Emerson が、「余に今日の洞察力を与えよ。さすれば古代と末来の社会が知られよう。われわれは実際に何物の意義を知りたがっているのか。桶のトモロコシのあら粉、平鍋のミルク、巷のパラード、ボートの情報、眼の一瞥、肉体の形と歩き振り、自然の周辺と極地に常にひそむところの最高の靈的理由の崇高な存在を余に示せ。両極端性の充滿したあらゆる些細なものを示せ、その両極性はそれらを直ちに永遠の法則に合わせるものだ」、続いて、「光が波動し、詩人が歌う原動力となると同じ原因に帰せられる店舗、鋤、元帳を示せ、しからば世界はも早たいくつな寄せ集めでなく、がらくた部室でなく、形と秩序をもつものであり、些細なものなく、謎はなく、ただ1つの計画が、最も遠い尖塔や最も低い溝を統一し、活気を与えているのだ」と述べているところから明白である。卑近平凡なものの中に The Final Reason を発見するため文人も学者も自然を研究すべきなのであって、ただ美しいもの崇高なもののみが意義をもつわけでないことを論じている。このような意味で Whitman が克明な観察者であることを自分自身認め、事物の半面の靈性を考えながら終始した点では Emerson の忠実な弟子であったと云うことができよう。

新時代の詩人の要素や表現についての心構え、又題材について Emerson からうけた影響がどの様に Whitman に表現されているかは、初版序文

中の“The United States themselves are a poem” が暗示するように枚挙にいとまがないので、最も興味あると思われる矛盾性ということについて考えたい。

5. 両 極 性

Whitman は “Song of Myself” の51節の中で自己矛盾を許容して次のように云っている。

Do I contradict myself?

Very well then I contradict myself,

(I am large, I contain multitudes.)

この矛盾は自己に含まれた両極性である。この自己矛盾の Whitman の告白は明らかに Emerson の “Self-Reliance” の中での矛盾性に関する一節から来ているものと考えられる。

「愚かな首尾一貫性は小人のお化けで、ちっぽけな政治家や哲学者や神学者の崇拜するところだ。偉大な魂は首尾一貫性とかかわるところはない。偉大な人は壁の上のわが影に関心をもつ方がよい。今考えていることを激しい言葉で云え。明日は又明日が考えることを今日云ったどの言葉に矛盾しようと、激しい言葉で話せ」と云う一見暴論と思われるこの論は、彼があらゆるものにこの両極性が不可欠のものと考えているところから来ている。そして「誤解されることは偉大である」としてコペルニカスやキリストやルーテルの例をあげている。この両極性は宇宙の法則であり、彼の compensation の思想の中心となっている。“Compensation” の中で Emerson は次のように述べている。

「われわれは自然のあらゆる分野に、両極性即ち動と反動に出会う。暗黒と光、熱と寒冷、波の満ち退き、男性女性、植物と動物の呼吸、動物体の水分の量と質の平衡のうちに、心臓の収縮拡張、液体と光の波動に、求心力と遠心力の中に、電気、流電気、及び化学的親和力の中に出会う。…

不可避の二元性が自然を二分する、それ故あらゆるものは半分である、そしてそれを完全ならしめる別の半分を暗示する。例えば精神と物質、男と女、奇数と偶数、主観と客観、内と外、上と下、動と静、肯定と否定である。』

これらは外界に認められる現象であるが、Emerson にとって世界のあらゆるものはこの両極性のために平衡し安定を保持しているのである。しかも個々のものが内部に両極性即ち矛盾性を含んで安定している。そして矛盾するもの同志の間に Compensation が行われているのである。これは彼が若い頃から考えていた宇宙の法則である。

Whitman の詩句の中にもこの二元性を現すものが多く見られる。霊肉はもとより、善と悪、目に見えるものと見えないもの、過去と未来、生と死などが相対矛盾するものとして扱われているが、彼のデモクラシーの思想は明らかに男女相対するものの平等観から出発している。そしてこの相対矛盾するものは一体どこから出発したか、彼によればそれは次に歌うように The dimness から生れた両極である。

Out of the dimness opposite equals advance, always substance
and increase, always sex,
Always a knit of identity, always distinction, always a breed of
life.

彼にとってこの The dimness (時々彼は The float とも呼ぶ)の世界は絶対の世界であるが物の出現の前の状態であり、ここでは両者いづれとも判別できない世界であり、人間の認識にはいらぬ世界である。この平衡を得た相対物は眼に見える世界の存在物であって、それら2物は非常に堅固な Soul の世界に立脚している故に地上では誠に所を得ており、完全である。この float の世界は Emerson の云う The final reason であり Over-Soul であり又彼が Plato から知った真の實在であるアイデアの世界である。

Whitman の考え方によると、この float から生れた平等なる 2 者はどちらを欠いても存在できない。

Lack one lacks both, and the unseen is proved by the seen,
Till that becomes unseen and receive proof in its turn.

(Song of Myself 3)

I find one side a balance, and the antipodal side a balance,
Soft doctrine as steady help as stable doctrine,
Thoughts and deeds of the present our rouse and early start.

(S. of M. 21)

凡て地上に現われたものは各自の中に両極性をもちながら、同時に相対するもの間に平衡を保っている。そして Whitman の考えによればこの両者は無縁のものでなくお互から生れてくるものである。輝かしい日は暗い夜から、夜は日から、男は女から生れ、女は又男から生れ、死は生から生れ、生は死から生れる。彼の詩“*This Compost*”は生は死からをテーマとしたものである。丁度鶏が卵から生れ卵は鶏から生れるように両者は相対するものにその存在を頼っている。すべて相対としてこの世に現われたものはその本源において同質であり、愛も憎しみも同質の本源の現れ方の相違であり、相手なしには認識にはいらない。Emily Dickinson が彼女の詩“*I Found the Phrase*”の中で比喩的に述べているように、暗黒のみの中で養われた人に、太陽をチョークで書いて説明しようとしても無駄であり、焰も紅で描いても駄目である。

Whitman は既に初期版の中でこのような idea を詩句に表現しているが、Emerson の“*Compensation*”では両極性とその平衡について述べるだけで、後印度哲学を経て書かれた“*Brahma*”と云う詩に現われているような“*Shadow and sunlight are the same*”という境地に達していないように思われる。

そしてこのような平衡をもった地上の生とし生けるもの、あらゆる存在

が完璧な姿をとって現在生あるものは生を、存在するものはその存在を楽しんでいるのである。全ては所を得ているのである。そして Whitman はこの両極性からその float の世界を考察する。

I ascend fom the moon, I ascend fom the night,
I perceive that the ghastly glimmer is noonday sunbeams reflected.
And debauch to the steady and central from the offsprings great
or small.

(S. of M. 49)

“Leaves” 第2版に収められた彼の最もすぐれた抒情詩 “Out of the Cradle Endlessly Rocking” は、海辺に愛の巣をもっていた夫婦鳥の雄が相手を失った嘆きの中に、詩人が自己を投影させて雄鳥の嘆きを人間の言葉に歌ったものであるが、果しなく揺れる海の響を背景にした、相対物の平衡の破壊に対する詩人の嘆きである。このような破壊から Whitman のすばらしいリリズムが生れている。同じように、男女平衡から出発した彼の democracy の理想が、後に南北戦争によって破壊された時も “Drum-Taps” に見られるようなリリズムを生んだとも云い得よう。

む す び

Whitman が「生命の詩人」と云われる理由も、地上相対物の絶対的安定の基礎となっている soul の世界を踏まえて、生とし生けるものの生の喜びの世界を見ているからである。soul の信念は彼の生涯に渡って変るところはなかったが、その基礎は quaker として、Emerson の初期の思想から得られ、その後の彼の著作によって強められたものに相違ない。Emerson がその炯眼をもって主張したものをいち早く摂取消化して、独自の表現で詩句に表明した Whitman の芸術は、だからと云って評価が下るわけではない。その詩に訥弁のそしりや、玉石混淆のそしりが聞かれるとしても、その雄渾な想と彼独特の表現の仕方は破天荒であり、他の詩

人の摸倣できないところである。

“Leaves of Grass”の草は Emerson に最初の肥料を与えられて成長し、南北戦争を経て版を重ねる毎に大きく育ち、今日の“Leaves of Grass”の姿となったが、Whitman と云う詩人は Emerson なしではとうてい世に出ることはできなかつたであらう。

注：Emerson からの引用は凡て Modern Library College Editions の The Selected Writings of Waldo Ralf Emerson に依つたが繁雑をさけるため page 数は省略した。

1. Gay Wilson Allen, *Walt Whitman Hand Book*, p.30.
2. Edmund Wilson, ed., *The Shock of Recognition*, p.236.
3. The Dial : 1840年から1844年まで Transcendentalists によって出版された同人雑誌、初め Miss Fuller、後に Emerson が編集した。内容のよくわからぬため新聞雑誌からたたかかれている。
4. Bhagavad-gita : 聖なる人 Krishna の歌った詩で宗教・哲学に関する Hindu の思想を示すもの。
5. The Vishnu Purana : Hindu 教の Vishnu 派の聖典、インド教の三主神の一である Vishnu を最高神として世界の創造者保持者としてあがめた書。
6. The Upamishads : 紀元前5世紀頃に成立した、Veda 文学の一つ、散文や詩によって書かれ、万有の本体の探求、現象界の展開、業、輪廻、解説の教義を中心としている。そしてバラモンの Brahma とヒンズーの Atman が同一であると説く。因みに紀元前5世紀頃にバラモン教は民間宗教と合併してヒンズ教となり、同じ頃釈迦が出て仏教をつくつたが、3派の宗教の帰一する思想は、Vedanta 哲学に云われる如く梵天（大我、宇宙霊）と個我（self）とは同一であるとする点である。